

## ユーチューブで「ちがさき丸ごと博物館」配信中！

動画共有サービスYouTube（ユーチューブ）で、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の活動の様子をご覧ください。

まち歩きガイドや講座をはじめ、さまざまな事業を展開している「ちがさき丸ごと博物館」ですが、日程が合わず、参加してみたいけれどまだ参加したことがない、という方には特にお勧めですし、単純に市内の魅力を再発見できる内容になっています。

市役所の「ちがさき丸ごと博物館」のホームページから直接リンクできるようになっていますので、ぜひご覧ください。



## ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会

### （略称：ちがさき丸ごと博物館の会）の活動

#### ■浄見寺地元まつりへの参加

4月19日（土）浄見寺地元まつりに参加。

「浄見寺ガイド隊」で民俗資料館・旧和田家周辺の史跡のガイドを実施しました。

#### ■「茅ヶ崎の古（いにしえ）の歴史を尋ねて」

4月19日（土）（地元から発信する旅づくり実行委員会）と協働。

香川駅から下寺尾遺跡などを巡り、民俗資料館・旧和田家まで文教大生とともにまち歩きのガイドを行いました。

#### ■丸ごと博物館講座

7月12日（土）「南湖の文化人巡り」のまち歩きを、社会教育課と協働で実施します。

#### ■2014年度体制

5月24日に開催された第7回総会において、昨年度同様の以下の体制で推進することになりました。今後ともよろしくお願いします。

{新役員} 会長：加藤幹雄（事務局長兼務） 会計：川合重貞 監査：鈴木國臣

### ちがさき丸ごとふるさと発見博物館って何？

茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材など、「このまち」らしさをもついろいろな事柄を幅広く選び出し、これらを都市資源と呼ぶことにしました。これらの都市資源を調査・研究し、それぞれがもっている意味や魅力を広く市民に周知する一方、それぞれを関連付けて散策や各種イベントなどで活用を図ることにより、茅ヶ崎を改めて知り、茅ヶ崎を愛する心を育み、ひいてはまち全体の活性化を図ろうとするものです。そして、都市資源は地域のかけがえのない宝物として、地域により保護され育てられていくことになります。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視しています。

### 編集後記

文人の散歩道を集めてみようかと考えていた今号、ふと過去に耳にしていた作家・城山三郎さんのお好きな散歩道について編集会議で話したところ盛り上がり、私がたまたま近所に住んでいたことから井上紀子さんに取材を申し込みました。井上さんのことは子どもの頃から存知あげていましたが、日頃交流があるわけでもなかったのに、こころよく取材を受けていただけました。沢山のお写真と資料もご提供いただき大変感謝しております。子どもの頃、近所にあった沼地でおたまじゃくしを取って遊んだ思い出は同じで懐かしかったです。また、井上さんのお母様には子どもの頃よくお車に乗せていただきましたが、今回井上さんに私の車に乗っていただきお返しできて良かったです。（小林）



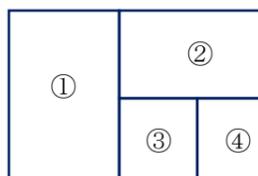
（愛称は「ちがさき丸ごと博物館」）



# 文学の散歩道～文人が愛した茅ヶ崎～

茅ヶ崎は、かつての邸宅が記念館となっている開高健氏、追憶碑や詩碑が建っている国木田独歩氏や八木重吉氏らをはじめ、たくさんの文人にとってのゆかりの地として知られています。

文人たちの足跡を追った今号。直木賞作家の城山三郎氏の次女、井上紀子さんのご協力を得て、たくさんの貴重なお話をいただき、文人の愛した茅ヶ崎に出会うことができました。素敵なプライベート写真も満載です。



- ① 昭和30年代後半頃、直木賞受賞後も数年間、茅ヶ崎から岡崎の愛知学芸大学（現：愛知教育大学）まで片道4時間をかけて通勤していた。
- ② 晩年、取材にて。相模川周辺。
- ③ 東海岸北の自宅庭にて。
- ④ 茅ヶ崎小学校にて。

（写真提供：すべて井上紀子さん）



▲書庫にて

## 城山 三郎 (しろやま さぶろう) 氏

昭和2 (1927) 年~平成19 (2007) 年。  
昭和32 (1957) 年『輸出』で第4回文学界  
新人賞、昭和34 (1959) 年、『総会屋錦城』  
で第40回直木賞を受賞するなど、小説家とし  
て活躍。  
茅ヶ崎へは昭和32 (1957) 年12月に転居  
し、最期まで茅ヶ崎で暮らした。  
ちなみに、ペンネームの由来は、「三月に城山(名  
古屋市)に引っ越した事」から。



▲取材のご協力いただいた  
次女の井上紀子さん。  
著書に「父でもなく、城山  
三郎でもなく」(新潮文庫)  
などがある。

### 1 名古屋から東京 東京から茅ヶ崎へ

名古屋で直木賞を受賞しましたが、受賞したことで落ち着いて仕事ができなくなつたため移転を考え、知り合いのいない東京へと引っ越してきました。東京に来た後、より落ち着ける鎌倉や鶴沼辺りに住まいを探しましたが、すでに住んでいる先輩文人方に気を遣うのも嫌で、作家が少なく、また東京へも岡崎(通勤先の大学があった)へも電車1本で通えること、そして妹さんが茅ヶ崎に住んでいたことから、茅ヶ崎を選んですぐ移転を決めました。

引っ越しは大みそかの12月31日だったので、近所の人からは夜逃げした若夫婦と思われていました。しかし、奥様が明るくよく笑うし、子どももよく育っていて、どうも夜逃げではないと分かっていったようです。最初は南湖に近い東海岸に住み、しばらくして東原(東海岸北)へ移りました。

当時、茅ヶ崎から岡崎までの通勤には、準急で4時間かかりましたが、講義の準備などにあてるその4時間がとても好き(大切にしていた)だったそうです。

### 2 海

移転してきた当初から、海は大好きで良く出かけていました。しかし、茅ヶ崎海岸がかつて海軍の演習場と知ってから、少年兵時代のつらい思い出がよみがえり、行くのを躊躇するようになり、後年は進んでいくことはなくなりました。

少年時代、米軍の上陸作戦に対して、竹の先に付けた爆弾で特攻攻撃する訓練を受けており、訓練中に「特攻は油壺送り」などと言われた思い出から、茅ヶ崎も戦場になったかも知れないことなどを想像し、心を痛めたようです。



▲東海岸北の自宅の庭にて。  
奥様と。



▲東海岸北の自宅の庭にて。  
子どもと遊ぶ(上)。孫と遊ぶ(下)。



▲晩年。取材にて

### 3 好きだった散歩道

晩年、よく散歩した場所が、中央公園や高砂緑地です。

中央公園は、仕事の合間に一周して、駅へ戻って本屋などへ立ち寄るというのが、一つのパターンになっていました。「ちょっと、セントラルパークへ行ってくる」と言って出かけるので、家族はニューヨークに行くのかと勘違いしたそうです。後で「セントラルパーク=中央公園」と気づいて笑い話になりましたが、ニューヨークへ突然行くのも不自然ではないくらい、思い立ったら行動するのが早く、行動の理由などをあまり説明しませんでした。

高砂緑地は、あの辺りの雰囲気が好きでした。裏道を歩き、花や他所の庭、鳥などを観ながら歩くのが楽しみでした。

また、「聖鳩(みはと)幼稚園横~徳洲会病院裏~たまやの通り」は、紀子さんが小学生の頃は茅ヶ崎小学校へ通う道で、家族皆の馴染みの道で、これもお気に入り。後年、車が通るようになり、茅ヶ崎らしさがなくなったと寂しがっていました。

### 4 ゴルフ・レストラン・喫茶店

スリーハンドレッドクラブのゴルフ場へは、バスかタクシー、でよく行きました。ゴルフは大好きで、ご長男や紀子さんのご主人、小説家仲間とよく行きました。ゴルフ場が交流の場であったようです。コースでいろいろな動物と会えるのが楽しくて、家でその動物の話をよくしていました。

もともとはゴルフ反対派でしたが、医者から「健康には歩くことが良い、ゴルフが良い」とすすめられ、はじめたところ夢中になったようです。また、湘南シーサイドの打ちっぱなしの練習場へは、子どもの頃の紀子さんを連れてよく行きました。

外食では、駅ビル内の「つばめグリル」が仕事場も近く、編集者との打ち合わせが夜遅くなった時には一緒に食事をしました。「チェス」、「セゾン(今はなし)」といった喫茶店も行きつけ。エビグラタンが好きでした。

城山氏の茅ヶ崎での暮らしについてもっと知りたい方には、『湘南 海光る窓』(平成元年(1989))、文藝春秋)がもっともよくまとまっています」と井上さん。ぜひお読みください。

都市資源  
コラム

## 茅ヶ崎が登場する文学



茅ヶ崎が登場する文学について、興味深い例を、二つ紹介します。

一つは夏目漱石の随筆「思ひ出す事など」に茅ヶ崎が出てきます。この随筆は、胃潰瘍のため伊豆の修善寺の宿に転地療養している時の話をつづつたものです。引用すると“彼等は健康のため、一夏を茅ヶ崎に過ごすべく、父母(漱石と鏡子夫人)から命ぜられて、兄弟五人で昨日まで海辺を駆け回っていたのである。父(漱石)が危篤の報知によって、親戚のものに連れられて、わざわざ砂深い小松原を引き上げて、修善寺まで見舞いに来たのである。”別のところに出てきますが、漱石の子供たちの過ごしたところは十間坂下のようなようです。

もう一つは、三浦綾子の小説。かの有名な朝日新聞による懸賞小説入選作「氷点」とそれに続く「続氷点」のなかに、幾度か茅ヶ崎が出てきています。主人公陽子の育ての母夏枝の父が、大学の先生をやめてから茅ヶ崎に移り住んでいることになっています。陽子の兄徹が、茅ヶ崎の祖父を尋ねるなどといった内容で、この小説の中心的な舞台にはなってはいません。三浦綾子が、この祖父をして茅ヶ崎に移り住ませたのは偶発的ではなかったのではないかと思います。三浦綾子本人が、終戦直後ごろ結核を病んでいるので、結核療養所として全国的に有名だった南湖院が茅ヶ崎にあったことが念頭にあったからだろうと推察できます。(川合)

都市資源  
コラム

## 島尾敏雄さんと私

<島尾敏雄(しまお としお)氏>

大正6年(1917)~昭和61年(1986)

「出発はついに訪れず」、「死の棘」などの著作で知られる。  
神戸、長崎、奄美、東京、茅ヶ崎、鹿児島などに住んだ。

島尾さんが奄美大島の名瀬市から茅ヶ崎に移住したのは昭和52年(1977)60歳の時で、私が茅ヶ崎に居を構えたのも丁度その頃でした。島尾さんの住まいは我が家のすぐ近く、通勤時にはいつもその前を通っていました。この頃、私は島尾さんが著名な作家とは全く知りませんでした。お会いしたのは5~6度で、言葉を交わしたことはなく、お会いした時は近所の人として軽く会釈をする程度でした。島尾さんは私より背は高く、控えめで物静かな方だった記憶があります。島尾さんの年譜を見るとこの茅ヶ崎時代は大きな賞を受賞されたり、日本芸術院会員になられたりと多忙の中、充実された日々を送っておられたようです。島尾さんは昭和56年(1983)66歳で鹿児島県に転居しました。私は今になって島尾さんの代表作「死の棘」を読んでいます。島尾さんが茅ヶ崎でどのような生活を送られたか、またどんな道を好み、散策されたかを知りたいと思いエッセイなどから探しています。島尾敏雄全集第15巻エッセイ「散歩道の先取り」の中に「いずれ腰痛のはがれた暁には、地図を片手に茅ヶ崎町じゅうを片っぱしから歩いてやるぞ」「行き止まりの道を引き返すなど悪くないではないか」と書かれていましたが、好きな場所や散策した具体的な道の名前などは残念ながら描かれていませんでした。引き続き探してみたいと思っています。(加藤)